

「スティーブ・ジョブズと禅」 SOTO禅インターナショナル総会講演録

前北アメリカ国際布教総監 秋葉玄吾

2月16日、檀信徒会館三階「桜の間」においてSOTO禅インターナショナル平成23年度総会が開催され、前北アメリカ国際布教総監である秋葉玄吾師より、「スティーブ・ジョブズと禅」と題された講演がありましたので全文を掲載いたします。

師は平成22年に13年間務めた北アメリカ国際布教総監を退任され、現在は北アメリカ国際布教師として、カリフォルニア州オークランドに自身が創設された好人庵禅堂に赴任し活動を続ける傍ら、現在進行中の天平山禅堂プロジェクトの発起人としても、実現に向け精力的に活躍されています。

北アメリカ国際布教師の秋葉玄吾でございます。この場でお話しをさせていただきますこと、感謝申し上げます。

このSOTO禅インターナショナルの講演の依頼を受けましたとき、「知野老師がスティーブ・ジョブズの禅の師だったこともあり、この機会に北アメリカの禅の状況などについて話してもらえないか」ということでした。北アメリカの曹洞禅について語られるとき、鈴木、前角、片桐各老師がキーパーソンとして話が展開されます。知野老師も同時代に活動された方で、北アメリカの曹洞禅敷衍に貢献された方であり、後輩同僚であった私が、この機会に多少なりともその功績を明らかにするのも、私の努めかと思ひ、引き受けたのでした。

私は渡米してより24年になりました。昭和62年7月、カリフォルニア州のオークランドに禅グループがあり、そこに北アメリカ開教師として任命され赴任しました。

私が渡米する契機になったのは、実は知野老師と関係があったのでした。昭和56年2月下旬、知野老師のお弟子さんに誘われ、8日間ほどサンフランシスコ市に滞在しております。



秋葉玄吾師

その時、サンフランシスコ禅センターの摂心に一週間参加しましたが、それが初めてのアメリカでした。

その折に、ロスアルトスにあったハイク禅堂を訪ねたのでした。そこで初めて知野老師に出会い、この時、知野老師は開教師活動14年目、43歳の脂の乗った独り立ちの布教をされていました。

ガレージを改造したという板敷の禅堂で2炷坐禅をし、30人前後の、こざっぱりした感じの、30～40歳代のアメリカ人男女が坐っていました。

この時のサンフランシスコ禅センターでの摂心参加が契機となり、後年私は開教師（現国際布教師）として渡米することになったのです。

その年スティーブ・ジョブズ氏は26歳、すでにウォズニアックら天才的なエンジニアとアップル社を起こし、若くして「ビジネスを大きく変えた男」とレビュー誌にも取り上げられる、億万長者の事業家でした。

あの日のハイク禅堂に彼がいたかどうかは知る由もありません。私は一介の雲水でありました。

ここで、知野老師の経歴に目を通してみます。師は昭和13年、新潟県生まれ。駒澤大学を経て京都大学の哲学科修士号を取得。その後、永平寺で2年間修行されました。サンフランシスコ禅センターを開かれた鈴木俊隆老師の招聘に応じ、知野老師は昭和42年北アメリカ開教師として渡米、サンフランシスコ禅センター、タサハラなどで、僧堂生活のさまざまなことを初期のアメリカの曹洞禅の修行者に指導されました。ハイク禅堂、サンタクルーズ禅堂などへも鈴木老師の指示で出向っていました。

2年程して知野老師は帰国しましたが、ハイク禅堂のメンバーが知野老師のお師匠さんに手紙を書き、知野老師をハイク禅堂に送り出して欲しいと訴えたのです。昭和44年2月、知野老師はロスアルトスの禅堂に赴任されました。その後、昭和55年サンタクルーズ山脈の山中に慈光寺を創設、昭和59年にはニューメキシコ北部、ロッキー山脈内の山地に鳳光寺を開創され、多くのメンバー、修行者を育てたのでした。

また、チベット仏教のリポチェがコロラド州の山中に、チベット仏教研究所としてナロパ大学を設立する手助けなどもして、そこで禅仏教、書道などの手引きなども行っていました。弟子や信者はヨーロッパにもいて、平成14年スイス山中の弟子のところを訪ね、休養中、遷化されました。

遷化から1ヵ月程して、サンタクルーズ山脈の山中にある閑静な慈光寺で、知野老師の葬儀が執り行われました。式は泉の湧く池のほとりで、かつて知野老師がゆっくりと歩いたであろう、その場所で挙行されました。私は北アメリカ総監の役職中でもあり、その乗炬を務めさせていただきました。



講演のようす

アメリカで初めて会った開教師が知野老師であり、後年、その葬儀の乗炬を取るとは夢にも思いませんでした。不思議な縁だと感慨深いものがありました。その葬儀にスティーブ・ジョブズ氏の奥さんが参列していたのを知ったのは数年後のことでした。

ここで、アメリカにおいて曹洞禅がどのように展開していったのか、その歴史を垣間見たいと思います。北アメリカでの布教はさかのぼること90年になりますが、禅ブームが起こったのは1960年代になります。この頃のアメリカは「混迷の60年代」と呼ばれています。冷戦構造から生まれたベトナム戦争の狂気は若い人を蝕みました。世界の富を一国に集めたような繁栄、偽善的な価値観、空虚さなどを忌避し、革新的な生活スタイル、精神文化を創造しようともがく若い世代、ビートジェネレーションと呼ばれる一群が産まれました。ヒッピームーブメントなども起こりました。

この時代、カリフォルニア大学バークレー校で東洋哲学の講座をもっていたアラン・ワッツが「禅」を講義しており、ビート世代の若者の間に「禅」は知識として広まってきました。禅の公案に登場する禅者たちの反権威主義的な自由さ、孤高、高潔、ラジカル、独立独歩、生き生きとした生き様、意外さ、直感的鋭さ、単純な生活、簡潔明快な言葉など、ビート・ヒッピーの若者たちの創造性を刺激したのでしょうか。一大禅ブームが起こりました。いわゆるビート禅です。

詩人のゲーリー・スナイダーは道元禅師の『山水経』の巻を読み、「道元はエコロジストだ、自然の働きに対して深く際だった洞察を有していた一人の思想家としてみることもできる」と敬服しています。

昭和31年、前角博雄師が禅宗寺へ、昭和34年、56歳であった鈴木俊隆師が桑港寺に赴任し、参禅活動が行われるようになりました。昭和35年には山田霊林師が第5代開教総監として禅宗寺に着かれました。山田総監は着任後すぐ「禅仏教昂揚研修所」を設立、曹洞宗の只管打坐、修証一如の禅の布教を展開する方針を定めました。日本から若い開教師を所員として招聘しており、その中に片桐大忍師もおりました。

当時、日系寺院で坐禅会を開き、白人の参禅者が寺に出入りする、という状態は日系一世メンバーには心よくない光影と映りました。しかし、アメリカ社会の中にある寺という条件を考慮に入れ、日系人の将来を見据えたとき、アメリカ人一般がメンバーに加わるほうが寺院の維持のために有益であり、禅の布教にとっても重要であるとの判断だったと思います。

当時は道元禅師、瑩山禅師の著作の翻訳もほとんどなく、その教えを紹介するために大変な努力を開教師は払いました。開教師は自分の修行を通して曹洞禅の教えの実例を示さなければなりません。開教師は日常的に行じる坐禅を在家信者にも開放し、講義、提唱、作務、学習、そして摂心を含む厳格な修行の仕方を確立していきました。僧侶も陸続と生まれました。

70年代は禅センターが活動的に力強く拡大していきます。開教師の弟子たちが各地に禅センターを築き、何千人もの修行者がアメリカの禅文化に参加し、語録、経典の翻訳、偽文翻訳、袈裟、絡子、作務衣、着物など衣類の縫い方、進退、所作、鳴らし物などの習得が進んだのです。

今日現在、北アメリカには約400人の僧侶、250以上の禅センターがあり、アメリカの曹洞禅が形成されつつある状況に至っています。仏教がもつ宇宙観、世界観、人間観の豊穡さ、深さ、宇宙にあるありとあらゆるものとの一体観、個物への限りない慈悲の念、それら仏教の精華がアメリカ人の心の糧として広まっているのです。



多数の聴講者が来場した

さて、話をスティーブ・ジョブズ氏に移します。ジョブズ氏は昭和30年2月24日に生まれていますが、両親は学生であり、親の反対もあったため、養子に出されました。

高校に入学し、ジョブズ青年は60年代の影響を受け、カウンターカルチャーに興味を抱きました。その頃同じ高校出の5歳先輩の天才的な電気少年、のちにアップルIを作り出す、スティーブ・ウォズニアックと知り合いました。2人のスティーブは性格が反対で、一方は激しく、外へ向かい、一方は静かで、内に向かう性格でした。

昭和47年、スティーブ・ジョブズは17歳、オレゴン州にあるリード大学に入りました。自由を重んじる校風とヒッピー的なライフスタイルで知られている大学でした。入学後、精神世界、悟りに関するさまざまな本、ババ・ラムダスの『ビー・ヒア・ナウ』、鈴木俊隆師の『禅マインド、ビギナーズマインド』、リチャード・モーリス・バックの『宇宙意識』など、図書館に通い読んでいました。

もう一つ、フランシス・ムア・ラッペの『小さな惑星の緑の食卓—現代人のライフスタイルを変える新食物読本』という本が、大学1年生のジョブズに大きすぎる影響を与えました。とにかくこの頃、菜食主義に禅、坐禅にスピリチュアリティ、LSDにロック—当時の大学キャンパスで流行っていた悟性を求めるサブカルチャーの象徴となっていたさまざまなものが、ジョブズの中で一つに混じり合っていたのでした。

ジョブズは、両親が一生かけて貯めたお金で学費を賄い、おもしろくもない講義を受けるのが嫌だったと、18ヵ月大学で過ごした後、昭和49年2月、ロスアルトスの実家に戻ります。18歳でした。

そして、ジョブズはインド放浪へ出ています。「僕にとっては真剣な探求の旅だった。ぼくは悟りという考え方に心酔し、自分はどういう人間なのか、何をすべきなのか、知りたいと思ったんだ」と彼は目的を語っています。インドを放浪したが、彼は赤痢になったり、金欠になったり、苦行、質素を体験しても悟りも師も見いだせなかった。7ヵ月インドの田舎を放浪し、ロスアルトスに戻っています。

19歳という多感な青年スティーブは、人間的に成長しようともがき、自分が養子に出されたこと、生みの親を知らない、心の痛みを抱え、自分は何者なのか、自分探しを続け

ます。そして、禪に大きな影響を受けるようになり、永平寺に行こうと考えたこともありましたが。しかし、こちらにとどまるよう師に言われてやめた。ここにはないものは向こうにもないからと。実際、師はすぐ近くにいたのです。ロスアルトスのハイク禅堂でほほえんでいる人だった。ジョブズは正師に出会ったのです。昭和50年、ジョブズ19歳、知野老師37歳の邂逅でありました。

知野老師はハイク禅堂の開教師として5年目に入り、盛んな活動を展開している時期でした。ハイク禅堂の務めの他、サンフランシスコ禅センター、タサハラをサポート、スタンフォード大学やカリフォルニア州立大学サンタクルーズ校、社会人コースでの禅仏教講演、各地の禅グループへの指導など、禅僧の充実した活動期に入っていました。ジョブズは知野老師に出会い熱心に曹洞禅を学んでいくようになり、「弘文老師との出会いに深く感動し、気がついたら、なるべく長い時間を彼と過ごすようになっていた。」と述べています。

私はジョブズのこの言葉に知野老師の面目躍如たる家風があると感じ取ります。多くを語らず、柔和に人を包み込んでいく慈愛、知野老師の特性のひとつです。

そしてジョブズは、「老師にはスタンフォード大学で看護師をしている奥さんとふたりの子どもがいてね。奥さんは夜勤だったので、僕はいつも夕方から師のところへ行ってたな。で夜中に帰ってきた奥さんに追い出されるわけさ」と、語っています。

ジョブズは心を開いて知野老師と接し、個人的な苦しみについて語ったこともあったでしょう。曹洞禅の正しい修行とは何か、正しい坐禅とは何か、悟りとは何か、そして、修行そのものが悟りなのだ、悟りは自己の内にある、自己は即ち仏性なのだ、坐禅の姿が悟りなのだ、といった曹洞禅の特徴を知っていき、心に納得する安心を得ていったでしょう。ジョブズ氏は「出家の相談もしたが、弘文老師からは、事業の世界で仕事をしつつ、スピリチュアルな世界とつながりを保つことは可能なのだから、出家はやめたほうがよい」と諭されています。

ジョブズのリード大学時代の時の友人もハイク禅堂に通っていました。弘文老師はおもしろい人物だったと言っています。彼の英語はひどいものでした。俳句みたいに詩的で、何かを暗示するような言葉を断片的に話すのです。そのため、坐って話を聞いていても、半分ぐらい何を言っているのか判りませんでした。それでも結構楽しんでいました。開教師は経典や語録をかみくだいて、英語で話す、大変な労苦を背負っています。まして、仏教については白紙の人びとです。こちらが当たり前と思うことも、先方はチンプンカンプンというのはしょっちゅうあります。知野老師も密かに悪戦苦闘されたのだと思います。別の友人は、当時のハイク禅堂をこう振り返っています。「みんなで弘文老師の坐禅会に行きました。私たちは坐蒲に坐り、上座に老師が坐っていました。あそこでは、心を乱すものを締め出す方法を学びました。とても不思議な経験でした。雨が降っていた日には、そういう環境音を利用して、坐禅に集中する方法なども教えて貰いました。」と。さまざまな人がハイク禅堂で坐禅をし、知野老師のユーモア、優しさ、真面目さ、誠実さに触れ、曹洞禅の教えを学んだのです。

ジョブズは、知野老師がタサハラ禅マウンテンセンターで指導するときは、参加するようになりました。タサハラは山間深い谷間の底にあり、川が流れ、温泉も湧く、絶好の場所にある道場です。若いジョブズは他の参禅者にまじり、坐禅や作務に励んだことでしょう。ジョブズは僧堂生活の合理的な規則性、簡潔な日常性こそ、仏の道だと気付いたのではないかと思います。知野老師とジョブズの関係は、その後も深く長く続き、17年後（知野老師54歳、ジョブズ36歳）には、ヨセミテで行われたジョブズの結婚式を知野老師が執り行いました。

昭和51年、ジョブズとウォズニアックはアップル社を立ち上げ、パーソナルコンピュータという産業を興していきました。この歴史的偉業はウォズニアックの業績であり、ウォズニアックのマシンを中心に会社を興したのはジョブズです。ウォズニアックは生みの母、ジョブズは会社を興した父といえます。この後は、アップルは一躍時代の先端をいく会社として注目を集めました。

アメリカの禅の実践者のひとつの特徴として、禅仏教への取り組み方も、現代の総合的な知の刃を振り、禅の思想を解剖し、取れるものはとって生かし、実践していこうとすることがあります。仏教の教えを禅はどう実践していくのか、自己の身の上はどう実現していくのか、それを重視しますが、この仏の道を、現実の日常生活上、実際に歩むということが、意外と難題なのです。身と口と心に三法印、仏の印を標して、仏の道を現成して生きる、それが個々人の最大の課題であります。スティーブ・ジョブズ氏は、新しい熾烈なコンピュータビジネス社会にあって、仏道という大道を堂々と歩んだ人と呼んでもよいのではないかと思います。



当時の写真もスライドで紹介された

このお話しを閉じるにあたって、知野老師とスティーブ・ジョブズ氏の鎮魂のために次のエピソードを献げたいと思います。これは「非思量」の坐禅と言った薬山禅師のお話です。誰もが非思量の自己ですので、誰もがたとえ一時の坐禅の姿になれば、それは非思量以外の坐禅ではあり得ないのです。が、このエピソードは、普段、日常、行住坐臥そのままが非思量であることを示した話です。

寺の事務長が、久しく説法台に登らないでいた薬山禅師に聞いた。「修行者たちは禅師さまのご法話を心待ちにしておるのですが、ひとつ、ご法話をしてくだされませんか。」

薬山禅師は「わかった。修行僧を集める鐘を打ちなさい。」と承諾した。

修行僧は、「おお、禅師さまのお話しが聴ける。」と期待して集まった。

禅師は修行僧が待っている講堂に現れ、説法台に登った。一暫く黙ったまま坐っていた。そして、一言も発せず台を降り、方丈の間に帰ってしまった。

事務長はあわてて禅師を追い、方丈の間で聞いた。「先刻は修行者たちのために説法しようとおっしゃりましたが、何故、一言もお話しにならなかったのですか。」

禅師は答えた。「お経を解説、研究する学者もいる、仏教倫理を解釈し論ずる研究者もいる。説法は彼らに任せられる。衲は、この通りだ。」という従容録からの一段です。

薬山古仏は、自己をとりまく生命あるもの、無機物すべての形あるものの説法を聞く耳をもち、眼を持ち、眉毛を備えておられ、「休迹なる悟迹を長長出ならしめた」（『そこ』を大きく脱け出していった）全き個の自己が環境とともに生活をされていたのでしょう。今ごろは知野老師もジョブズ氏も、尽十方世界での明珠となって坐禅をされていることでしょう。

最後に、この場をお借りして、曹洞宗の海外布教に精魂を尽くされた先人開教師、元開教師のご尊師がたに感謝の誠を捧げたいと存じます。また、海外布教に多大の関心を寄せられ、法愛を注がれ、ご支援をくださった各ご尊宿方へ、心よりお礼を申し上げます。

今後とも皆さまの、海外布教に対するご協力、ご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。以上で、お話しを終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。